

南
田
偵
一

詫
び

冬邑	42
北のない街	28
モリシンソウ	22
午前9時	10
懐、さ、ら、ち	4
目次	

懐、さ、ら、ち

ぼくらの詩集の一頁目は、謝罪だと決めていた。

隔てられた、砂分かちの時間を釘留める。視覚化された時色は、昨日飲んだレモンスカッシュと相似で、忘却の可能性、記憶の曖昧性、上下交互の転換故に、しばし眩暈している。

綺麗な物、の列挙…沙悟浄

河童は架空の生物であるから穢れを知らない。砂時計の砂。あなたの万年筆から綴られる筆跡を、駅前から狭い路地をいくつも辿ってゆくように憶えておく。埋める、尽くさずに、余白の眩しさを、常時浴びるための、見開き頁。息をついた、綺麗な物は指が足りて、余ってしまふ、と。その時の小指は、頁に収めるには、細すぎて、若干あつい。

海豚の描かれた、カラオケ室の電灯を絞ると、あなたに落ちてきた帷が、黒々暗々と、けれど、増勢して波隙をも撥ねさせる。何も書き残していない、まっさらの竹尾製ノートを、何度も指のひらで撫ぜ、撫で、撫でて、なでて、ひらたくわらった。ブラックライトだと、察していた。かれこれ十年前と変節のない、と、ノートの端くれをマイクに拾わせて、碧光りを、遺しておきたい。よく刷り込んでおいてほしい。頭の余っている箇所、視覚化が果たせないから。胸部器官の空っぽの音、これもよく、マイクの先端粒子、つぶ、つぶさに聞かせてあげておいて。

ららち ちさな
ならちち ちならち ならちち ならちち
ならちち ならちち ならちち
ならちち
ならちち

十三級、リュウミンP r o M。あなたは、その五行を、雨中、喉を膨らませ、土道の中央で啼く蛙を見るような、ほつれた眼差しで愛でていた。幾度も、口遊んでは、文字片の連なりを、甘味が湧いてくると信じているように。あるいは、無味となるのを惜しんでいるように。後者を想うのは、決まって傘を忘れた薄曇りの宵であって、ブラックライトを当てたら、晴天でないこと。それよりも、雨の予兆を、詩集のクラシックリネン雪70・5 kgを擦ることで、口に出さず、空気を味わっていたい、とも。

K70%の文字を、一箇所紛れ込ませれば、空も、海も忘れ得ぬ。飛魚にまつわり、真偽性の乏しい逸話を、あなたは胸内に秘めていた。うつすらと、前の、白い歯を覗かせて。中天を越えた頃合、飛魚は自身の置き場に惑う瞬間があるのだ。魚である自覚性を、寸、湧き立たせる衝動が、跳ねさせる。飛魚は俄か、陽光の暖かさを攫み取り、海中へと還ってゆく。魚であることも忘喪して。熱を分かち合う、が、透性を巡らせる、風明の広い、がり。

さ、ら、ちのリュウミン針に

喰らう、つく

跳びうお、の

三白眼を

埋めてゆく

濁性

ぬぐって

縫うて

さら、に、

ちら、に、

ひきよせて

抱う、擁う

こころ、に、うつる憬ヲ

それぞれ

もつてゐる

雪遊びをしただけの手袋を、なんで洗うの。雪は水なんですよ。母を
問い詰めたことがある。臆病である人で、いつも誰かに謝っていたか
ら。たんに訊いているだけでも、こちらの自覚として、詰っている
は、こういうことなのだ、辞書に刻まれている薄い文字感と意味感を、

より濃ゆくする。母は、寸時待ってから、胸を平らにして、埃が滑じ
っているの。雪は天から落ちてくる前に、埃に纏わりつかれて……。そ
こで母は言い淀んで、ごめんね、と、詫びを乗にし、雪は一緒じゃな
いと、ああは白練と、ひらひらと舞えないの。手袋を洗ってやること
は、日々の白い習慣としてであって、何も悪くはない。

手書きにしようか。あなたは最後まで逡巡を貝（間）見せ、臆鞘炎を
恐れた時も、静謐という言葉を思い出させてくれるように笑んだ。

お詫びします。

と、印じる。共、つう

午前9時

2023年8月24日午前0時から午後11時59分まで。東京都府中市分梅町三丁目の電信柱に設置されている防犯カメラ番号3-21の録画映像を、2023年9月2日午前10時から午後9時59分まで視聴するのが任務であると言いつかつた。小学六年生の女の子、仮名・アリコが、2023年8月24日午前11時29分39秒、東京都府中市分梅駐在所に、溺れた足取りで入ってきて、勤務中の警察官に不審者情報を告げた。アリコは2023年8月24日午前9時頃、小学校を早退し帰途についていた。本人の感覚時間2023年8月24日午前9時10分、実際時間2023年8月24日午前9時24分、視聴時間2023年9月2日午後7時24分、鎌倉街道分梅駐在所交差点、四十代後半（アリ

コ曰く、叔父の雰囲気似ている。六年前に一度だけ駄菓子屋で透明碧の液体を買ってくれた。飲まなかったら、叔父は爪楊枝で穴を開け、宙に翳し、白い舌を出して、飲んだ。飲んだとわかったのは喉が尺取り虫のように蠢いていたから。それきり会っていない）と思われる男から声をかけられる。元気が。おまえのお母さんの昔の馴染みだ。アリコは本当に叔父なんだろうと思っていた。元気、と答えたが先は続かない。男は折り紙と同じ紫色の薄手のトレーナー（右腕を突き出したヒーローが描かれていたとアリコは記憶している）、マクドナルドと同じ赤色のジャージパンツ、ブックオフと同じ黄色いスニーカーを着用していた。アリコは感覚五分くらいはじろじろ観察したというが、三十秒くらいだろう。アリコと男が会話を開始したのが2023年8月24日午前9時25分。2023年8月24日午前9時34分にはやり取りは済んでいる。これからおじさんで行こうか。アリコは国語がよくできた。文法的におかしいと察し、どこへ、と聞いた。お母さんのところ。ビデオのある位置から、二人の表情は読

み取れない。200%拡大、300%拡大、ドットの集合体（ドット数2万9625個）が細胞となって、男の顔を構成していく。ドット数2万9625個が話しかけ、アリコが特別身構えている姿勢には見えない。アリコがそれから約二時間後に派出所に駆け込んだから、ドット数2万9625個は不審人物と仮称され、ビデオを見返すことになっている。正確には2023年8月24日午前9時34分56秒、アリコはドット数2万9625個から離れ、姿を消す。ドット数2万9625個は棒立ちに、アリコを見送る。アリコはその後、派出所の記録で2023年8月24日午前11時29分、派出所にドット数2万9625個とのやり取りを告げにやって来た。アリコは、事前に母親にLINEを送っていた。叔父さんに似た人に会った。母は答えたという。その叔父さんなら、もう死んでいると。アリコは嘘だと察した。叔父が死んでいたら母が言わないはずはない。葬儀に行かないはずがない。母は冠婚葬祭の、葬、で、喪服の腕をまくる人だから。アリコは母が警察に行くよう押し付けてくることに抗

った。LINEは二十回ほどの応酬がある。アリコが折れた、普通は大人が折れるものだが。応酬のうち、ひらめきが降ってきた。よく瞬いた。アリコは、叔父以上、であると確信に至った。派出所から依頼され、ドット数2万9625個が戻ってきていないかをビデオで辿る。早送りや一・五倍速にしてもいいのだが、拘束時間に変わりない。二十四時間かかるなら普通に流していても同じだ。

なぜアリコは午前9時に早退したのか。

一、朝から体調が悪く、母に言い出せなかった。登校したものの体調はさらに悪化、朝のホームルーム後、担任に申し立て早退した。はたして一人で帰るだろうか。担任は母に連絡して連れて帰りはなかったろうか。二、登校するつもりだったが学校には行かなかった。うろうろしているうちに男に声をかけられた。

2023年8月24日午前7時20分頃にアリコは起床した。目覚ましはセットしなくとも起きる。二度寝はしない。耳だけが今日の天気を探る。窓外に吊るしているプラスチックの飛行機の模型は雨滴を受け止める。音が立たない。アリコは立つ。それよりも明確な音がする。玄関戸はストッパーが狂い、手を離すと勢いよく閉じる。母親の出かけた音。きつとわざとなのだ。2023年8月24日午前7時25分には食パンを五分セットして焼き始め、その間にマグカップにリンゴジュースを注ぎ（アリコはできれば常温で飲みたい。一度母親に内緒で電子レンジでリンゴジュースを温めたことがある。酸味が飛んで、ページの砂糖水になった。そういえばオレンジ色はあるのにリンゴ色と言わないことに気づいた）、トイレに行き、洗顔とうがいを済ます。食パンが焼けると、スマートフォンから流れる音楽が二曲も流れないうちに食べ終わる。すぐに着替え髪を整え、家を出る。午前8時を少し回っている。小学生たちは緑に塗られた舗道を、帽子を目深にしながら伝ってゆく。アリコは無帽であった。どの季節にもアリコは髪を晒

している。いつでも肩まで切り揃えられた髪は母親がカットしてくれる。

なぜアリコは二時間も時間を空けたのか。

一、アリコは母の命に従うつもりはなかった。男のことを報告したことも悔いていた。母に嘘をついてもよかった。交番に赴いた、と。母は執拗に確認を取りに行くだろう。娘のアリコが不審者に拐われそうになった、と話に尾鰭をつけて。

アリコは2023年8月24日午前11時15分、ビデオカメラの設置してある場所に再び立っていた。秒が進んでいく。アリコが画面から消えてゆく。ちらっと後ろを向いて、足の踵。2023年8月24日午前11時17分。以後、アリコも男も姿を見せなかった。

アリコの母・コズエ（仮名）は、不審な男がアリコには叔父と教えていたハトコノセイスケ（仮名）だと察していた。アリコがセイスケに初めて会ったとき、まだ六歳だった。アリコにはイトコもハトコもないから、ハトコと言ってもわからない。オジサンと言っておけば、のちのち自己判断できる知恵がついてくるだろうと、放っておいた。セイスケは十二年前、放火殺人未遂事件で逮捕され、実刑十五年、模範囚として減刑され出所しているという話を聞いていた。教えてきたのは、もう死んでいると思っていた大伯母だった。遺言だと思ってコズエに話した。セイスケが近々戻ってくる。戻ってきたら、よろしく頼む。生前贈与で税務署に露見しないよう五百万円、毎月一度計五回口座に入金された。

なぜアリコは午前9時に早退したのか。

アリコは、学校など行っていないなかった。セイスケと会っていた。五

日前2023年8月19日、登校時、アリコはセイスケと鉢合わせたのだ。2023年8月21日午前8時30分、もう一度会うことを約束した。

2023年8月21日午前8時30分、二人はJR府中本町駅近くのラウンドワンの前で待ち合わせに成功した。京王線分倍河原駅はコズエが使う駅だから避けた。ラウンドワンは開店する前、硬いシャツターが降りている。府中本町駅へ通じる階段を上り、府中競馬場へと向かう。フジビューウォークを歩いてた（ここから富士山を見たことはない。分梅町三丁目に向けて、御旗場道を目指して歩いていれば西の空に富士が望めるから）。セイスケは、この道は緩やかに下つていと言った。ずっと下つていくのだと。言われるとアリコの足は次第に小走りになっていく。ふくらはぎが勝手に駆けてゆく。中学になったら陸上部に入るつもりだ。いろいろ話そうと思えば話せたが、アリコはセイスケの下り道の話をする最中、相槌だけを打っていた。このまま進んでも、競馬場は閉まっている。セイスケは途中で引き返そうと、今度

は上りになっていることを説明する。アリコはセイスケの足運びが遅くなり、先をゆく。大國魂神社の方へ行こうと、自ら提案した。表参道からではなく、西の細道から神社へ向かった。途中、鞆屋の軒先で茶臼の猫が寝そべっているのを見て、アリコは初めて笑んだ。背を撫でてやりたかったが、セイスケの前では恥ずかしかった。鞆が吊るされている。リュックもショルダーもウエストも。鞆に首はあるのか。府中市立中央図書館の脇から入り、表参道を突っ切った。土俵があるのを知ってるか。アリコは嘘だと思って黙っていたが、その通り土俵が出てきた。誰が相撲をするの。初めてセイスケに言葉をかけた。ちびっこ相撲だろう。学校にいないのか、太っている男。隣の教室に一人、思い当たるのがいたが、夏、プールの時間、泳げなくて泣いている姿が鮮明に残っていた。相撲なんて野蛮なことできるわけない。

聞かせよう。神様たちの話を。一人じゃないという
ことを。イクイメリヒコとサホヒメは夫婦だっ

た。サホヒメは実の兄サホヒコとも相愛の関係だったのだが、兄は謀反を起こそうとイクイメリヒコを殺すようサホヒメに命じた。イクイメリヒコの子を孕んでいたサホヒメは兄の命を断れず稲城（多摩川の是政橋を越えていけば稲城市に入る）に籠る。サホヒメは髪を剃り、その毛髪を頭にのせた。敵兵が引く張つても髪だけが手に残る。手首の玉の緒を朽らせる。衣服を腐らせる。サホヒメの分かつ物に触れても、サホヒメを捕まえることはできない。稲城に火が放たれた。イクイメリヒコは、子の名を言ってくれ、と哀切の声を浴びせる。火中から生まれたのだからホムチワケ。そう返事があるだけで、サホヒメは命を落としたが、ホムチワケは産まれた。

2011年6月11日、セイスケは放火殺人未遂事件を起こした。自らが住んでいた築二十四年の平屋の離れに火を放った。このとき、コズエと一緒にいた。セイスケはコズエと一緒に死ぬつもりだったと警察に話した。コズエは妊娠していた。父親は誰なのかコズエは言わなかった。アリコは、コズエは流産してしまったと聞いている。アリコは弟も妹もほしいと思ったことは一度たりともなかった。セイスケの神様の話を聞いて、母親が火中で子を産まなくてよかったと思っていた。自分はどうかやって産まれたのか。

セイスケは大國魂神社の鳥居を潜ったあと、三日後2023年8月24日午前9時に会おうとアリコに提案した。学校があるから無理だ、と伝えた。府中の神様は待つのが嫌いなんだ。正月、府中の家の門前には松の飾りがないんだよ。セイスケは、笑って、信号を渡り櫛並木に消えていった。2023年8月24日午前9時、アリコはセイスケと会った。セイスケは、待たされないでよかった、と笑った。子どもが産

まれたんだ。お母さんに伝えてくれ。そうとだけ言って去っていった。もう姿を見せない、とも。アリコはセイスケは死ぬのではないかと思つた。母に話し、渋々派出所に行ったのは、そのためだ。警察ならセイスケを見つけてくれるかもしれない。

なぜアリコは午前9時に早退したのか。

待たせないためであった。

モリシンソウ

わたしたちは森だった頃がある。

抜ける道、踏み叩くうちに

影も差さなくなつて、久しい。

左ハンドルの、

傾いだ西洋車が打ち捨てられていた。

迂回の木標を立てるとき

あなたは肘の一本を、もぎ取つて。

絆創膏さえあれば

事が足りる、と。

宵の雨は、籠もる香りが

青々と開く。

碧洋である

あの、駅前マンション屋上から、ならば

飛び込んでも

身体は碎かれず

沈んでゆく

あなたは颯めた。

肘をこすつて。

そのときに独りごちたの、を

わたしの耳葉は聞き逃さなかつた。

さする、自己の行いではない

こする、の孤独だけを潜めている

森なのだから

隣人は

そばだてるもので、あり、うる

遮蔽するには

貌が赤らんで

しい

しい

鳥の名前は覚えたばかり

モリシンソウ

は、あなたの腋下を寢床に

もうすぐの出産を控え

喘鳴を、一人夜に

森に入れば傘はいらない。

深緑色に染まった。

擬態のため息は、いつも

白明の

果実の裂傷と

ごく、よく似ていた。

いたいたしい。

雫を、あなたは足裏から

涌出する、残らず。

舌の根、潤う。

近道よりも

茨の道を。

ここも土醸の道であるの。

ぬかるんで

転び、

はじめて

土のにおいを知った。

駈けて

疾駆となって

風おこし、

落としてゆく

一葉、二葉と

あなたの掌の筋に

清河が流れてゆく。

上流に目を向ければ

それが、木洩日であった、と。

離、を埋めてゆく、枝が撓ってゆく。零れる声の泡、霧となって降り。
傘を取り合う時に、手が重なり合った。裸樹の前、後で待ち合わせ、
肩の触れ合いで、独りでは己れの熱さえ測れない。

あなたの睦むちが、障害ない。

北のない街

—

二年前に死んだ父は

死んだ直後から

父を喪失した

今は単なる死者に過ぎない

父だった死者A、は、ドーベルマンを飼うことに最後まで抗った。

殺す気か。犬嫌いだぞ。Aは宣うが従わず、Aの稼いだ金だというのに、生きている母は、ドーベルマンを買ってくれた。Aは予感どおり

ドーベルマンに首根っこを噛まれて、死んだ。母は泣き、笑い。警察が一応、調べた。彼らは口々に、

一応、

と前置いた。学校では笑われた。ドーベルマンに食われた親の子、と呼ばれる。ドーベルマンの株は上がり、Aのは、下がる。

泣かないのね、あなたは。

知野先生は、こっそり給食時間と掃除時間の合間の五分、わざわざ職員室に帰らず、言った。残した梅干しを、給食時間、やっぱりこっそり指で摘んで、真顔で食べて、種っ子を皿の端っこに置く。食べていいよ。言われずとも先生がいなくなったあと、食べるつもりでいた。食べた姿を見て、先生は、にっと笑う。もう一度、

泣かないのね、あなたは。

父に限らず、いつか死にますから、みんな。お父さんは殺されたの？ あなたに？ お母さんに？ ドーベルマンに？ さあ、自然死です。いつか泣く日が来るかもしれない。種、味する？ 答えなか

った。知野先生の味なのか、二十代後半の女の味なのか。わからない。いつか芽吹くのもしれないよ。泣いたときとおんなじですか。だといいね。

知野先生は一ヶ月後、いなくなった、街から。

二

諏訪という名の教師は、黒板に長野県と書き、キッツキミたい、なのを、描く。千葉は犬だったつけ。隣の山下が聞いてくる。額ははしない。強引じゃないか、犬なんて見えない。言ってやりたいけど、よす。

上に新潟県と書き、地形も描くのかと思ったけど諏訪は、よした。おんなじ、よす、でも動機は違うと思う。

新潟の南に長野県があります。軽井沢の南に諏訪湖があります。その諏訪です。先生は長野県出身のですか。いえ、違います。教室が、

しんとなった。高崎出身です。新潟の南の長野の南の群馬県、伊香保温泉の南にある高崎の山の方です。埼玉の北ってことですか。横田は前の方に座ってる。なんでわざわざ言ったんだろう。置き換えたところでわかりやすさに差異はないのに。教室はしん、としている。諏訪は横田をじつと見ている。三白眼。教壇の天板に両腕を突っぱねた状態です。

北はなくなりました。地図帳出して。

諏訪は地図帳の表紙を掲げて、見せて、ぱんと叩く。抹茶色のベタ塗りの表紙に「地図帳」と橙色のゴシック体が澄ましている。こたつを思い出す。みかんと緑茶、こたつの中で野球中継を、かつての父、死者Aはよく観ていた。ドーベルマンは思春期並みの脳みそを持つていたのかもしれない。反抗期。イラッとして父だった人を噛んだのか。母が訓練させていたのか。

北はなくなりました。

諏訪は同じことを口にする。例えば三十五ページ。方位記号があり

ますね、4みたいなやつ。黒ペンで塗り潰してください。隣に平行四辺形を描いてください。小学校の給食で出た、桃の節句の三色ゼリーを描いた。色はみんな灰色、久寿餅みたい。

東西南南です。先生、なら、三角形でよくないですか。女の声だった。振り返ると、橘が眼鏡の奥の目を細め、唇をすぼめている。こいつもキツツキだ。横田も橘もクラスで一位二位を争う秀才。お山の大将。張り合っている。

北はなくなりますが、三角形ではないのです。感覚的に、平行四辺形に近い。でも、北と言わないだけで、やっぱり群馬は埼玉の上にありますよ。上イコール北と頭ん中で自動的に変換できるのでおんなじじゃないですか。横田は少し鼻で笑った。

北がなくなつたことに、抵抗する必要があるんだろうか。秀才って奴は面倒な役割をしまわされている。東西南北が東西南南になって、何が不自由なんだろう。

北はなくなりました。

三回目だ。誰が決めたんですか。は？ 諏訪は大きな声を出した。みんなびびくりした。あれ、咳払いじゃね。喘ぎ声みたいじゃね。後ろでポソポソ聞こえる。山下の声は際立つ。

もうとつくにそうなってますよ。この街だって例外じゃない。北はなくなりました。どういうことですか。うちの高校の北は、中里つて所です。中里がなくなつたんですか。はい。でも先生、うちの高校の南は遠野窪と言います。遠野窪からしてみたら、うちの高校は北です。じゃあうちの高校もなくなつたのですか。男女秀才の共演、諏訪は、はい、答えた。続ける。

皆さん、北はなくなりました。四回目。徐々に浸透してくる。

かつての北は死者B。頭の中で命名が終わった。

北という名だった死者Bの思い出は、あんまりない。北という方角には、良山寺という寺があった。通っていた小学校の北という方角にあり、故・北の代名詞になっている。家からは、良山寺は東にあるけれど、良山寺は頑なに北だった。東はスーパートコダが占めていて、

三年前潰れ、今はカラオケ店になっている。諏訪が言うように、北という方がなくなり、死者Bになつたなら、良山寺もなくなることになる。死者Cとなるのだろうが、ネットで見るに、良山寺のホームページはまだ存在する。死者Cとならない。良山寺は小学校の南にある競馬場の、南にある迫田川の、南にある太平洋の、南にあるどこかの国の……ずっと南を行つて、地球を一周し日本に戻つてきて、日本海の南の、新潟の南、長野の南、ずっと南を行つて、舞田山の南、河北駅の南の位置にあるということになる。

先生、そもそも北はなんでなくなつたんですか。横田君、なんで生きてるんですか。え。生まれたからでしょう。はい。生まれたらどうなりますか。え。死ぬんでしょう、おんなじですよ。北も死んだんです。

やっぱり死者Bなんですね。つい口にした。パツと振り返つた女生徒がいた。髪が長い。黒い。目が合う。莉子だつた。

三

五日前、初めて莉子と並んで、帰つた。一緒じゃない。感覚、手応えない。歩きがおつそい。下り階段では老いた女の人にも抜かれる。老いた男の人にも。並んできたのが莉子だつた。どうしたの。どうもしない。ずいぶん慎重だから。階段ですつ転んで死にたくないんだよ。へえ。一番下まで、先に莉子が下りて、待っていてくれた。

を、あるね。

あるよ。使わないってことになつたら困る？ きつちり三秒考えた。というより数えた。要らないかも。じゃあ使わないでおこう。莉子はさつさと歩いていってしまう。老いた女の人や男の人に、追い付くも、莉子には最後まで追いつかない。

四日前、図書館の前のベンチでサンドイッチを食べていた。太陽の熱で食パンが少し温かい。中の卵は少し冷たい。カピカピになる前に、

舌の唾液で食パンを湿らす。また並んできた。空いてるところに莉子が腰をかけた。を使つてない。うん。あ、使ってる。心の中で。許容かな。ダメだよ。心の中でも。治外法権にならない？ ならない。でも嘘かもしれないよ。秋吉君は嘘をつく？ 言葉に詰まった。痩せちやうよ。これ、食べて。おんなじサンドイッチの包みを渡してくれる。あ、結構使つてしまうかも。でもね、使うなって決められて覚悟すればいいんだよ。サンドイッチはやっぱり温い。莉子はどこにしまつていたんだろう。本借りるの、後ろの建物で。図書館でしょ。そう。何借りるの。めくれない本。あるの？ あるんじゃない。借りてどうするの？ めくろの。ふうん。じゃあね。

三日前。学校帰り、莉子と鉢合わせた。駅の方へ、莉子は学校の方へ。忘れ物？ 違う。来るのを待つてくれたとか。あ、使つた。何を。あ、また。あ、ごめん。を、だね。今度からペナルティね。わかつた。ねえ、デートしよう。いいよ。

軽く言うから軽く答えた。どこ行くの？ 北のほう。あ、北はなく

なつたつて。言つてたね、諏訪が。何だろうね、あの話。死んだつて言つたでしょ、秋吉君。うん。お父さんが死者Aつてこと。うん、で、ほんとに北に行くの。珍しい言い方。そう？ ふつう方角で言わないじゃん。壮大でしょ。チンギス・ハンとかアレキサンダー大王みたい。太平天国の乱つてジゴクだよ。ああ、確かにね。

駅まで来て、莉子が路線図指さした。楕円形の路線図、最寄りから北目指すなら上になる。どこまで行く？ 行けるところまで。スマホ見た。午後四時過ぎ。遅くなつたらまずいでしょ？ うちは平気。両親働いてるから。うちも母親が仕事だし。お父さんは死者Aだし。うん。じゃあ泊まつちやおう。どこに？ 北のほう。騒がれないかな。大丈夫、しれつと帰ればいいでしょ。

田舎だねつて言つたら、莉子はそうでもないよ、ラブホあるし。入つたことあるの？ ここのについてこと？ 全般つて意味。なんて答えてほしいの。案外優しいんだね。

ドルフィン。青い建物ではなく、ピンク色一面で、白い波が立つて

いる。尾鰭逆上げて宙舞うのはドルフィンというより、鮭。寿司屋に入った気分で、すんなり入口潜れてしまった。ファミマみたいなメロディが流れ、背がじわつと、なった。莉子は受付脇のパネル見ている。ドルフィンの部屋空いてるよ。五千円。他の部屋より高い。

もっと北のほうに行けるね。うん。三千円の部屋にする。壁が光んなくてもいいよね。うん、構わない。一階にある、ただベッドが中央に大の字になってる部屋だった。二つに横並びの枕が橙色のランプの灯り、浴びている。

先に言つとくね。これきりならしよう。そうじゃないなら、しない。最初からそんな気ないよ。ほんと？ うん。魅力ない？ 莉子がベッドに仰向けになる。ひざ立てる。スカートの中が影になってる。目逸らした。

あ、いい調子。だいぶ良くなってる。何が？ を、言つてない。やればできる子。こつち来て。私、怖がらないで。怖くないよ。

怖いのは自分自身なんだ。

二日前。ラブホから出て、帰ることにした。どちらのスマホにも着信履歴がすごい。人気者。北のほうはいいの？ 莉子は電車の中で、一度電話していた。きつと親に。今から帰る。心配しないで。低い声。モース信号みたいに。ツーツツツー。

母にメールした。すぐ帰る。なんで連絡をしないの。心配したでしょ。莉子にメールを見せた。あ、を使つてる。莉子は笑った。目閉じて。なんで。いいから。

閉じた。

明日からもその調子でね。北のほう、をのこと。

いつもの駅で莉子と別れた。

一日前。風邪ひいた。ずっと眠って家で過ごした。学校休んだ。誰からも連絡がない。莉子から、あると思つていた。スマホずっと見つめる。律儀に莉子とのルール守る。褒めてほしい。早く学校に行きたい。莉子に会いたい。

今日、莉子がいなくなった。
理由はわからない。
北忘れろ。を忘れろ。
莉子忘れろ。
同義。

冬邑

冬邑^{とういつ}、と、ラジオで聴きかじって、味がしなくなるまで咀嚼して飲み下した。蝶が舞ったことがない。冷えた空気の中に、肉眼に張り付く雫が浮かび、掌を宙に置いておくだけで、海葡萄のような粒が連なる。蝶の羽根は透くほどの薄張で、雫が纏わると、一枚羽根へと接着し、二度と開かない。冬邑では蝶は進化をし、ただじつと土径で蹲っている。ふくり、と、時折膨らむことで接着を回避する姿は貝のようであると。退化、観る人によつては心の中で呟くと、洩れ聴こえてしまうのも冬邑で、よく起こる現象という。

湖の面が、ささくれるのは、風が撫でるから。小舟が漂っているのに誰も漕ぎ手はなく、毎日夕方五時頃になると、二度、三度と旋回する。雲一つない冬邑の空の下、二回。魚の体温ほどの温い雨が降りそぼる空の下、三回。雨に押し込まれて、晴天より一度回る数が多いのだと見立てる者がいるが、雨により嵩増した湖器の限界を超えて、回数が増えるのだと言う者もいる。いつ湖面に小舟が辿り着き、誰が乗っていたのかを知る者はいないし話題にしたこともない。小舟が湖の主であり、この存在が世界の何かしらの良い影響、悪い影響を創生しているとも、ラジオの声は紡ぐ。

冬邑に棲む人々はサンドイッチをよく食す。自家製の耳の削ぎ落とされた平たい一枚のパンに、粘度の強いピーナツペーストを塗り、前夜、冬邑の子供たちが小一時間、夕餉を食べる前の一仕事で胡桃の殻を割り、実を粉々にしたものを埋め込んでゆく。もう一枚には各家好物の野菜や獣の肉、湖の魚を調理したものを並べ、パンを羽毛布団の軽やかさで合わせる。冬邑の女たちはサンドイッチを、隣家へと持っていく、ピーナツと胡桃ではない面のパンを交換してゆく。未知の味があるということ、饗^{もて}なすということ。実際には冬邑の住民は、行き渡ったサンドイッチをその日には食べずに、挟まれている食材を刮^もぎ取り、貯蔵しておく。食材の微かな味と匂い、それに元からあるピーナツと胡桃の味と匂い。醜^{みにく}味は胡桃の、粒々とした食感であり、それを冬の朝に味わうことで、一日の冷気を凌げるのが真相である、と。

遺体を一日、家屋の軒先に逆さにぶら下げて。冬邑では、過去の時間を掻き集めることで、存続が保てる。七十年生きた老婆は先日、ひもすがら、吊り下げておいたら、四人家族で食いたげる干し肉が収まる金盥にびつたりの時間が溜まっていたという。それらを均等に、まだ十歳に満たない子等、女兒を優先的に配られ、冬邑でしか実らない、花^か様紫蘇^{しそ}、と呼ばれる葉をすり潰した液体に混ぜて飲む。苦味を少しでも甘くする役割を担っているのだが、案外、若くに死んだ者の過去時間には甘味も含まれているようで、悪い子は若輩の病人がいる家屋の前を通り過ぎるたびに、そうせい、と叫んで逃げてゆく。冬邑では、雫^{しずく}が目に見えるように浮遊している。その嬌声も、中途で萎え、そういった、ことのは、の欠片が地を埋め尽くしている。蝶は、こらえて、動かない。

南田偵一（なんだ・ていいち）
東京都出身。詩。

詫
び

南田偵一

2024年12月1日 初版発行

モリモト印刷

©Teichi Nanda, 2024 Printed in Japan

